昨年1月、それまで「いじめによる自殺」の事実を認めてこなかった文部科学省が、1999年から2005年までのいじめによる子どもの自殺が少なくとも12人にのぼることを、初めて認めました。解決策として出てきたのは、悪いものは排除するといういじめた側への厳罰化案や、マスコミの教師たたき、そして教育再生会議の「いじめ問題への緊急提言」に組み込まれた、子どもの素行について家庭に責任を問うという一項でした。

親としては、自分の子どもが、いじめにあわないように、そしてあったらどうしたらいいのかにとても敏感になってしまいます。

でも、親や教師への責任の押しつけや加害者への厳罰化が、本当に子どものための解決になるのでしょうか。

ここで考えたいことが二つあります。一つは、自分の子どもが、いじめられる側になるよりも、いじめる側になってしまう可能性の方がはるかに高いということです。いじめられるイメージは持てても、いじめる側のイメージ、さらには、直接いじめていなくても、自分の子どもがいじめに同調していたり、知っていて無関心であったりのイメージがなかなか持てないのではないでしょうか。いじめは当事者だけの問題ではありません。いじめる子はもちろん、無関心でいる子、何も言えなかった子でいることも含めて、指導することが大切だと思うのです。

もう一つは、いじめられている子だけを「困っている子」として捉えるのではなく、いじめている子も「困っている子」として捉えることも必要ではないかということです。いじめをする子のことを、何に追いつめられているのだろうか、という視点で見つめることです。

子どもの世界に起こっているいじめ問題の背景には、人を人として大切にしない社会的風潮という大人社会のゆがみや、子どもをとりまく暴力肯定の文化などがあると言われます。また、いじめの温床に、子どもを競わせ、追い立てる競争的な教育制度の問題があり、これが子どもたちに、多大なストレスを与えているとも言われています。そんな子どもたちの「生きづらさ」を受けとめることも大切だと思うのです。

「子どもは社会の反映」と言われます。現代社会を生きる子どもたちにとって、いじめも子どもの人間形成に避けて通れないプロセスの一つなのかも知れません。私たち大人は、いじめを子どもたちの問題と捉えるのではなく、私たち自身の問題として取り組むことが必要なのではないでしょうか。

交通安全啓発標語コンクール表彰

都留市交通安全連合会主催による交通安全啓発標語コンクールの表彰式を行いました。市内小中学校からの応募作品1,126点の中から選ばれた14名が表彰されました。最優秀賞の作品3点は、オリジナルのぼり旗として市内小中学校などに掲出されます。市内の皆さんも声掛け呼びかけを行い、交通事故防止に努めましょう。

入賞者

小学校　低学年の部

最優秀賞	『いもうとを　やさしくまもる　チャイルドシート』	谷一小	2年	岡本拓大
優秀賞	『飲酒運転　思い出してね　子どもの笑顔』	谷二小	3年	亀田莉那
優秀賞	『のまないで　ぼくらもルール　まもるから』	谷一小	2年	安富駿希

小学校　高学年の部

最優秀賞	『つながるよ　小さなゆだん　大きな事故へ』	谷一小	4年	小俣春歌
優秀賞	『安全は　あなたの心の　思いやり』	禾一小	6年	金子紗矢香
優秀賞	『交差点　車も人も　ゆずり合い』	谷二小	4年	志村糸織
入　選	『うんてんは　シートベルトを　しめてから』	禾二小	4年	平井友梨
入　選	『とまってね　子どもがわたる　つうがくろ』	宝　小	5年	前田安理沙
入　選	『よそみする　そんな油断が　事故のもと』	附属小	6年	天野祐希
入　選	『その一杯　なくしていいのか　家族の笑顔』	旭　小	6年	清水聖良

中学校の部

最優秀賞	『飲酒運転　その一口が　一大事』	一　中	2年	依田美穂
優秀賞	『運転は　車も見てる　子も見てる』	一　中	3年	権守　勤
優秀賞	『やぶらない　交通ルールは　命のルール』	一　中	1年	武原　遥
入　選	『大事だよ　あなたがマナー　守ること』	二　中	3年	志村未侑